キズナエピソード

袖城 セイラ　2話

//ADV形式開始

//都立有羽・教室

［ここあ］

「よーよー？

このクラスに、とびおってヤツ、いるかぁい？」

［とびお］

ある日の昼休み。

俺のクラスに変わった女子生徒がやってきた。

［友人］

「あ、あの人はまさか……！」

［とびお］

「知っているのか、お前」

［友人

「当然だ。一部では有名なここあ先輩だ！」

［とびお］

「先輩？　あの身長で3年？」

［友人］

「だから一部の人達の間で有名なんだよ！

ここあ先輩に呼び出されるなんて、お前……。

羨まし――じゃなくて、けしからんことしたのか？」

［とびお］

「いや、まったく心当たりがない。

でもまぁ、呼ばれてるなら行ってくるよ」

［とびお］

俺が前に立つと、

彼女はジロジロと品定めするかのように俺を見た。

［とびお］

「えっと、俺がとびおですけど、何か……？」

［ここあ］

「ふ～ん……アンタがとびおかー。

……でゅくしっ」

［とびお］

「うおっ。なんすか、急に」

［とびお］

突然脇腹をつついてこようとしたので、とっさに避ける。

すると、ここあはにやりと笑った。

［ここあ］

「とびおっち、やるねぇ～。合格！

ちょっとここあについておいで？」

［とびお］

何が合格だったのだろうか？

不思議に思うものの、ついていってみることにする。

［友人］

「なにぃ、上級生から呼び出し食らうとは……！

とびお！　親友である俺も助太刀するぜ！

って言うか、一緒に連れて行ってくれ！」

［とびお］

「いや、いい。

お前はそこでおとなしくしてろ」

［友人］

「くっ……！

この……裏切りモノォォォ!!」

//暗転

//都立有羽・校舎裏

［とびお］

連れてこられた先は、人目の付かない校舎裏だった。

まさか、これは漫画でよくある展開なのだろうか？

［とびお］

しかし、そこにいたのは喧嘩に明け暮れた番長ではなく、

この前に出会った美しい先輩――セイラだった

［ここあ］

「セイラ～、連れてきたよ～」

［とびお］

ここあがセイラの横につく。

そして、せっつくように彼女の背中を押した。

［セイラ］

「お、お久しぶりです」

［とびお］

「あ、はい、どうも……」

［とびお］

会った時と変わらず、セイラはとても美しかった。

今日は制服を着ているからか、

この前とは違った魅力を感じる。

［セイラ］

「えっと……あの……ふふっ」

［とびお］

「いやぁ……ははっ」

［とびお］

「お互いどう話を切り出したら良いかわからず、

互いに見つめ合っては照れ笑いを浮かべること数回。

先にしびれを切らしたのは、第三者のここあだった。

［ここあ］

「いや～、きみたち。

もうすでに、目と目で通じ合えるレベルなのかにゃ～？

ここあも仲間に入れてほしいにゃ～」

［セイラ］

「ちょ、ちょっとここあ……！

からかわないで」

［セイラ］

「そういうわけじゃなくて……。

ただ、なんだか気恥ずかしくて……」

［とびお］

「たしかに、改めて向き合ってると、

なんだか照れちゃいますね……」

［ここあ］

「はぁ……。

まぁ君達が満足しているなら、それでいいけどさ」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

ここあに飽きられたところで、

俺達はようやくポツポツと会話を始めた。

ゆっくりとしたものだったが、とても楽しいやり取りだった。

//次ページ

そんな俺達を見て、

ここあが呆れながらもボソリとつぶやいたのを覚えている。

「あぁ、この2人はくっつくね」

//ヴィジュアルノベル形式終了

//2話END